

武蔵野日曜聖書講筵

最後の晩餐

——マタイ伝第26章17～35節——

1964年3月15日

小池辰雄

過越の祝い 神の如くなるう これは我が体なり 霊的現実 キリストの本願悲願 「コイノニア 相対的絶対性 いかにも人間がダメかということ 洗礼と聖餐は一つ わが血の血、わが肉の肉」

【マタイ26】

17 除酵祭の初の日、弟子たちイエスに來りて言う 『過越の食をなし給うために何処に我らが備うる事を望み給うか』 18 イエス言いたもう 『都にゆき、某のもとに到りて「師いう、わが時近づけり。われ弟子たちと共に過越を汝の家にて守らん」と言え』 19 弟子たちイエスの命じ給いし如くして、過越の備をなせり。 20 日暮れて十二弟子とともに席に就きて、21 食するとき言ひ給う 『まことに汝らに告ぐ、汝らの中の一人、われを売らん』 22 弟子たち甚く憂いて、おのおの『主よ、我なるか』と言ひいでしに、23 答えて言ひたもう 『我とともに手を鉢に入るる者われを売らん。24 人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。されど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを』 25 イエスを売るユダ答えて言う 『ラビ、我なるか』 イエス言ひ給う 『なんじの言える如し』

26 彼ら食しおる時イエス、パンをとり、祝してさき、弟子たちに与えて言ひ給う 『取りて食らえ、これは我が体なり』 27 また酒杯をとりて謝し、彼らに与えて言ひ給う 『なんじら皆この酒杯より飲め。28 これは契約のわが血なり、多くの人のために罪の赦を得させんとて、流す所のものなり。29 われ汝らに告ぐ、わが父の国にて新しきものを汝らと共に飲む日までは、われ今より後この葡萄の果より成るものを飲まじ』

30 彼ら讚美を歌いて後オリブ山に出でゆく。

31 ここにイエス弟子たちに言ひ給う 『今宵なんじら皆われに就きて躓かん』 『われ牧羊者を打たん、さらば群の羊散るべし』 と録されたるなり。 32 されど我よみがえりて後、なんじに先立ちてガリラヤに往かん』 33 ペテロ答えて言う 『仮令みな汝に就きて躓くとも我はいつまでも躓かじ』 34 イエス言ひ給う 『ま



ことに汝に告ぐ、今宵、鶏鳴く前に、なんじ三たび我を否むべし』³⁵ペテロ言う『我なんじと共に死ぬべき事ありとも汝を否まず』弟子たち皆かく言えり。

● 過越の祝い

今月は、今日を入れて三回でありまして、今日が最後の晩餐、この次が十字架、その次が復活というような段取りであります。マタイ伝でいうと26章17節から過越の準備のことが書いてあります。最後の晩餐そのものは20節ですが、マルコ伝でいうと14章12節から、ルカ伝でいうと22章7節からという並行記事になっています。特にキリストの終りの方は、マタイ、マルコ、ルカは非常に詳しく記してあるわけです。

過越の祭の初めの日が、ちょうどイエスが最後の晩餐をとるときに当たりました。過越というのは、旧約をご覧になると分かるわけですが、ヘブライ語では「パッサー」といつて、「パッサツハ」という字からくる。もともとびつこをひく跛行的な歩き方を「パッサツハ」という。列王記略上2章18節、創世記32章32節に出ています。ギリシア語では「パスカー」と言われている。また、アッシリア語では「パッサチャー」と言つて、「なだめる」という意味を持っている。出エジプト記12章に、このアッシリア語の「なだめる」という意味に一番ふさわしいと思われる記事がある。

「エホバ、エジプトの国にてモーセとアロンに告げていたまひけるは、² 此月を汝らの月の首となせ汝ら是を年の正月となすべし。³ 汝等イスラエルの全会衆に告げて言うべし。此月の十日に家の父たる者おのおの羔羊を取るべし、⁴ もし家族少くして其羔羊を尽すことあたわずばその家の隣なる人とともに人の数にしたがいて之を取るべし。各人の食う所にしたがいて汝等羔羊を計るべし。⁵ 汝ら羔羊は疵なき当歳の牡なるべし。汝等綿羊あるいは山羊の中よりこれを取るべし。⁶ 而して此月の十四日まで之を守りおきイスラエルの会衆みな薄暮に之を屠り、⁷ その血をとりて其之を食う家の両旁の柱と鴨居に塗るべし。⁸ 而して此夜その肉を火に焼て食い又酔いれぬパンに苦菜をそえて食うべし。⁹ 其を生にても水に煮ても食うなかれ、火に炙くべし。其頭と脛と臟腑とを皆くらす。其を明朝まで残しておくなかれ、其明朝まで残れる者は火にて焼きつくすべし。¹¹ なんじらかく此を食うべし即ち腰をひきからげ足に靴を穿き手に杖をとりて急ぎて之を食うべし、これエホバの過越節なり。¹² 是夜われエジプトの国を巡りて人と畜とを論ずエジプトの国の中の長子たる者を尽く撃殺し、又エジプトの諸の神に罰をこうむらせん。我はエホバなり。¹³ その血なんじらが居るところの家にありて汝等のために記号とならん。我血を見る時なんじらを過越すべし又わがエジプトの国を撃つ時災なんじらに降りて滅ぼすことなかるべし。¹⁴ 汝ら是日を記念えてエホ



バの節期いわいびとなし世々これを祝うべし、汝等之を常例となして祝うべし。」(出エジプト12・1、14)

というような、だいぶ変わった記事がのつてます。なだめそなえものの供物としての当歳の羔羊の犠牲の血であるから、これはイスラエルであるということがハッキリするので、その家を打たないで過ぎ越して行く。それから、罪の贖いというようなことにだんだん、宗教的な儀式や意味合いが付けられてきたわけです。

罪は神の罰をこうむるに値し、死に値する。しかしながら、それをキリストという羔羊が、疵なき罪なき羔が我々に代わって引き受ける。それで我々は赦され過ぎ越されるといいますが、この「過越の祝い」という実に血なまぐさい事態でして、我々日本人の感覚にはあまり正直のところピンとこないわけです。

イスラエルの宗教は沙漠の宗教で、遊牧の民は肉食ですので我々の生活様式とだいたい異なることが違うので、日本人にはこのキリスト教というのがなかなか、そういう意味においても、受けとりにくい。仏教の悟りの方が平穩でなごやかで、いいような感じを受けるわけです。けれどもまた、人間の、神を神とすることのできない自己中心の在り方、いろんな意味において自分というものがどうにもならないということ、深刻に罪の認識をするときに、これは単なる悟りとか、いわゆる大慈大悲でもって済まされないと何ものかがそこにまた感ぜられる。ただ赦されても、古い生命だけではどうにもならん、赦されただけでは。

ところが、古き生命が、汚れたる、罪に染みたるところの生命がいつペン死を受けて、そして、新生命が、新しい生命がそこに与えられるという、非常に今度はバイタリティーのある生き生きとした、生命に満ちた事態となると、やはり、血なまぐさいようだけれども、このイスラエルに啓示されたところの宗教に実は本当の救いがあるということ、を改めて受けとらざるを得ない、というところに私たちは追い詰められているわけです。

仏教的な宗教にももちろん結構なものがあります。私は仏教も非常に、ある意味において、好きですけれども。福音の世界はそれよりもっと輝かしい、もっと生き生きとした素晴らしい生命に満ちたものであるということ、やはり、キリストの十字架、その復活、聖霊の事態にぶつかって、これはどうしても最後のものであるという、ただ一つの救いの道であるということ、また告白せざるを得なくなる次第であります。

● 神の如くなろう

そういう過越の祝いの第一日に、

17 除酵祭の初の日、弟子たちイエスに來りて言う 『過越すぎこしの食をなし給うため
に何処に我らが備うる事を望み給うか』 18 イエス言いたもう 『都みやこにゆき、
某それがしのもとに到りて「師うしいう、わが時近づけり。』



「わが時」というのは、そういう最後の決定的な時です。「カイロス」という字が使っている。決定的な贖罪の時、救いをもたらす、歴史の大転換をなさせるところの、空前絶後の瞬間、その時が近づいたと。

われ弟子たちと共に過越を汝の家にて守らん」と言え』¹⁹弟子たちイエスの命じ給いし如くして、過越の備をなせり。

これが、十字架にかけられるところの前の晩の話ですからね。私もエルサレムに行つて、過越の最後の晩餐はここでなされたという場所を見て参りました。もちろん、昔のままではないんですが。どうも、場所は多分まちがいなからうという所らしい。ちよつとやはり階段を上つていくようになってしまつてね。全くそこに立ちすくんで、何とも言えないことでした。

²⁰日暮れて十二弟子とともに席に就き、

有名なダ・ビンチの「最後の晩餐」の絵はフィレンツェに行くと思えるわけです。もうだいたい、原画はうすぼけているらしい。もちろん、当時の最後の晩餐の光景が、ダ・ビンチが描いたようなものではなかつたらうと思ひますけれども、しかし、ダ・ビンチがその精神を、その現実を実に躍如として表したということにおいては、世界の名画中の名画というわけなんでしょう。

²¹食するとき言い給う『まことに汝らに告ぐ、汝らの中の一人、われを売らん』

キリストにはもうハッキリ、それが見えている。

²²弟子たち甚く憂いて、おのおの『主よ、我なるか』と言いいしに、

「よもや私ではないでしょうね」というわけです。

²³答えて言いたもう『我とともに手を鉢に入る者われを売らん。』

現実を見まして、イエスはそう言われる。日本人みたいにお箸を使つて食べませんから、五本の指で食べるからね、ユダヤ人は。「指は天から授かつたフォーク」ですから、非常に自由自在に動くわけです。鉢に手をつつこんで、パンを浸して食べる。大体、みんな裸足ですしね。そして、食事する時に半分少し横になつたような姿勢で食べることがしばしばある。ユダがその時に鉢の中に手を突つ込んでいたわけです。それで、キリストはこう言われた。

²⁴人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。されど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを』²⁵イエスを売るユダ答えて言う『ラビ、我なるか』イエス言い給う『なんじの言える如し』

「いや、お前だよ」と。これは恐ろしい断定であります。

ユダは非常に優秀な弟子であつたという話です。サタンも元は優秀な天使であつた。その優秀な天使が、

「俺は神さまの如くなろう」



と思った。その衝動が、神を無視し——傍若無神です——神を無視して神の如くならうとすることが霊的傲慢というやつで、罪が最も深い。まだ感情的な動きくらいの罪は大したことはないけれども、意志的に自分は神の如くならうとして、自由独立を、神なき自由独立を謀ろうとする。

内村先生は非常に「独立」「自由」ということを仰った。無教会ではこの自由、独立ということは非常に美しい言葉になっています。もちろん、内村先生は、神におけるところの自由独立です。マルチン・ルターが言った「クリスチャンの自由」という、それであります。その自由は、全く自己の自由に死ぬことが本当の自由に生きることなんです。そういう自由ですけれども、自己の自由に死なない、直接肯定しているところの自由独立という自律的なやつは、ちょうど放蕩息子が父のもとを離れて行って、「俺は」とやったやつで、これは却って行き詰まってしまう。

意志的な罪が最大の罪です。霊的傲慢。ユダの中にもそういう角度のものが、

「俺もひとつキリストのごとく」

という衝動がおそらくあったと思われまます。神の意志を、神意を体して神の如くされていくことはいくらでも差し支えない。そして、

「ついにキリストの姿に化するなり」

というのがパウロの、

「栄光より栄光に到りて」

というのでありますが、紙一重でとんでもない天地の差であります。そういうサタン的な衝動にかられたのがこのユダです。他の弟子たちもユダを尊敬していたであろうというようなことが、或る註解書にも書いてあった。それくらいな弟子であったようです。

人間は、その長所がまた短所となる。また、短所が逆に長所となる。だから、相対的に短所長所なんて言ったって、そんなものをただ手離しに当てにしたら、とんでもないことになります。どのみち、これはみんな神さまにお返ししなければいかん。そして、今度は神のものとして受けとらないと、みんな私するからどんな善きものも私したら、これはみんなダメになる。

●これは我が体なり

26 彼ら食しおる時イエス、パンをとり、祝してさき、弟子たちに与えて言

い給う『取りて食らえ、これは我が体なり』

ラテン語で、

「ホップ エスト コルクス ヌーム」

と言いまして、ルターとツヴィングリがマルブルヒの城の一室で論争した。その城の一室に私も行った。ここにルターが坐つて、ツヴィングリがこつちにおいて、ここで論争した



んだというようなわけです。その部屋の中にも宗教改革時代の昔を思い出しましたが。マールブルヒというのはドイツのちょうど真ん中にある非常に小さな大学街です。ここでルターが、

『『エスト』とあるから、『これは私の体である』とキリストが言われた。パンが体である。パンとキリストの体は合体したものである』
 と言って譲らない。

「いや、キリストは『体である』と言われたって、それはパンをもって象徴されたので、譬えで言われたのである」

と言ってツヴェイングリもまた譲らない。ツヴェイングリの方が確かに現代的解釈です。ルターの方は、

「パンはパンである。けれどもしかし、それは同時に『私の体である』とキリストが言った」

というわけで、ルターは多少こじつけと言ってはあれかもしれませんが、少し乱暴な——

「儀文は殺し、霊は活かす」

というが——多少、儀文の方に傾いたきらいがなきにしもあらずと見てもよかろうと思います。しかし、ルターの気持そのものの中には、決して、いい加減に取り扱ってはいけないうちがある。その点では、ツヴェイングリよりもルターの方が、角度がなお深いんですけれども。

カトリックの方では、パンそのものが何か変質してしまつて、そして、キリストの体になつてしまふというような、ちよつと摩訶不可思議な考え方をするそうですが、それを神学的には

「トランス・ズブスタンティアツイオン」(化体説)

という。体に化する。ルターの方は、その「化体説」というのでもなければ、また、ツヴェイングリの「グライヒニス」として「譬え」のように象徴的に解すでもない。そこにもひとつの真理はもちろんあります。ところが、ルターの方は、キリストの霊が同時にそこに共存するんだという「合体説」というので、

「コン・ズブスタンティアツイオン」(合体説)

という。「コン」とは「共に」ということ。共にそこに共存する。

そういうような取り方は、どれでもいろいろありますよ。問題は、しかし、「どう解釈するか」ではない。キリストはなぜ、こんなことを言われたか。

「取りて食らえ、これは我が体なり」

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

なんてキリストは言われた。キリストは葡萄の樹でも何でもありません。それなのにキリストは、

「我は葡萄の樹である、お前たちは枝だよ」



と言う。

「私を葡萄の樹に例えれば、お前たちは枝のごときである」
なんて、そういう厳密な言い方をしないんだ、キリストは。

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

なんて言っている。葡萄の樹はちゃんとイスラエルにたくさんありますよね。葡萄の樹を見ながら、「あそこに葡萄の樹があるが」なんて言わないで、「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」と。霊的な事態というものは、文字つらを詮索してどうの言うようなことではない。

葡萄の樹があつて、そして枝がある。ここに茎があつて、そして花が付いている。

「我は茎なり、汝らは花なり」

なんてなわけです。そういう現実はそのであるが、しかし、私が本当の葡萄の樹で、お前たちはそれからもし離れたならば枯れてしまう枝だと。そのひとつの葡萄の樹の譬えをもつて言いながら、具体的な譬えをもつて言いながら、キリストの発している現実、その譬えられたものよりもっと凄い現実を言っている。この葡萄の樹は枯れないんだ。そこらにあるのは、時間がたてば、年数がたてば枯れるかもしれないが、キリストという葡萄の樹は枯れない。本当にそれに連なる枝になれば、これも枯れない。そういうわけのものです。

非常に具体的な現実であるということ、この目に見え耳に聞こえ手にて触れるところの五感の現実のものをもつて、キリストは真理を言われる。観念でものを言わない。だから、真理の最適な表現は実は、詩的な表現です。ドラマチックな表現です。哲学書よりも文学書の方が本当は真理を深く表現することができる。そのうちに、ダンテが終わったら、ドストエフスキーでも有志と読みたいとも私は思っております。

● 霊的現実

そういうわけで、今これは葡萄の樹ではなくて、パンなんだね。

「これは私の体だ」

と言う。

「私は葡萄の樹だ」

と言うのと同じことです。パンをさいて、「これは私の体だ」と。パンは食べるものでしょ。食べるものだから、

「私という本当の霊の体をお前たちは食べる。これをみな食べるね、しかしこれが私の体だ」

と。「パンをとつて食らえ」というときに、パンを食べると同時に——同時でなくたってかまわないけれども——本当に霊的にキリストというパンを食べるということ。ルターの合衆説は実は、その本質に近いねらいをもつて、ルターは語ったというわけです。いわゆる



合体と言いましても、それは何か科学的な意味において合体と言っているわけではない。ヨハネ伝6章を「こらんになればお分かりのとおり、

「私を食らえ、私を飲め」

とキリストが言われた。そうしたら、

「何とこれは乱暴なことを言う人か」

と言つて、ユダヤ人たちが不思議がつたということが書いてあるでしょ。51節、

「51我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。

我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん」52ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』53イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。54わが肉をくらひ、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。』(ヨ

ハネ6・51～54)

「これは比喩である」とか、「譬えて言えば」なんて、キリストは言わないんだ。

「私の肉を食らえ、私の血を飲め」

と。それも、「精神的に」なんていうのではない。この頃は、「精神的に」なんて言っているが、「精神的に」なんてダメですから。霊的なんです。霊的に、霊的現実として。霊的な生命をもっているこのキリストの肉を食らい、キリストの血を飲む。それでなければ、新しき人間創造ができない。

私はビラに

「新しき人間形成」

と書いたんだけど、それはおとなしく書いたのであって、本当は「人間創造」なんです。あまり大きなことを書かない方がいいと思つて、穏やかに書いた。しかし、福音の世界は、文化的な単なる形成ではなくて、これは創造である。もう、頭でひねりだしたような理屈だの、論理だのは要らんですよ。そんな妙な付け刃式な信仰は要らん。この前も、内村鑑三先生の『求安録』から言葉を引用したでしょ。自分を委ねてしまつて、棄ててしまつて、

「信ずるは、他に自分をゆるして、自分を棄てて、他に任せてしまつことだ。そして、

我は我の愛する人に我を任すなり。

「愛する人」というのはキリストのことです。

我をゆるし、我を任す人、即ち、我の愛する者は我の生をつなぐものなり。即ち、愛は生命の性にして、生命は実に愛なり。」

と。素晴らしい言葉です。愛することと、生きることと、信ずることとは一つであります。それが言語的に言つてもそうなんだから。「ラブ、リブ、ビリーブ」は語源的に言つても同じだ。ドイツ語の「リーベン」(愛す)、「レーベン」(生きる)、「グラウベウン」(信ずる)も



同じことです。

そういうように直々な、「食べ、飲む」という事態が——これを信という信仰の事態で受けとる——信の極みはそういうものだということを別なところで内村先生が言ってる。何も内村先生をかつぐわけでも何でもないけれども。また無教会のことを言うと、

「また、始まったか」

なんてみんな言うかもしれないが、せつかく、内村先生がいいところ、気がついてくださっていたんだが、そいつを遠慮なしに先へどしどし伸ばすことをしないで、無教会が足踏みをしてしまったから、妙なことになっているかもしれないというわけだ。

●キリストの本願悲願

『取りて食らえ、これは我が体からだなり』²⁷また酒杯さかずきをとりて謝し、彼らに与えて

言い給う『なんじら皆この酒杯さかずきより飲め。』²⁸これは契約のわが血ちなり、多く

の人のために罪の赦ゆるしを得させんとて、流す所のものなり。

「キリストがこれだけ長いことを言われたかはちよつと疑問だ」

というようなことを言う学者もある。始めの方は簡単に言っただが、後の方はえらく註解的な言い方をしている。しかし、とにかく、キリストは多分これだけの内容のことを言われたと思います。

贖罪の血である。しかも、贖罪ということをしなければ、その血を飲んでも、それは生命にならない。

「血は生命のあるところ」

と、創世記9章にも書いてある。我々から血を三分の一も取つたら、もう大抵まいってしまふ。とにかく、血というのは、生命の所在といわれるくらいに非常に大事なわけです。また、血が濁つたらダメです。罪なき人の生命、血において象徴されているところの生命。その生命である血です。これを飲めと。霊血です。わが肉を食らえと。これも霊肉である。最後の晩餐、聖餐という。キリストの血と肉、霊的な生命に具体的に与かる。キリストは、もうこれから十字架にかかって、あつち側に行ってしまう。最後に、弟子たちと一緒にご飯を食べる。もう、イエスはやる瀬なき気持だね。

「何とかして、私の中にあるこの生命をお前たちに分けたい。今、自分を切つて、これをお前たちにやっただけで、それはどうにもならん。この私が本当のパンなんだ、

私は本当の葡萄酒なんだ」

ということ、どうしても言いたくしょうがないから、キリストは、ちょうど食事のときに、「の如く」なんて言っているひまが、気持の余裕がないから、

「これは私の肉だぞ、これは私の血だぞ」

と。これはもう何と言いますかね、本当の迫りですよ。



「この非合理的な言い方が分かるか。受けとれるか」

というわけですよ。これは全然、解釈にならない。私はそれが本当だと思う。

「そうだ。もし、このキリストを食べ損なったら、生きられるか」

とあなた方は思いませんか。

「お前たちは、この私を食べ損なつて、飲み損なつたら、生きられるか」

という、非常な本願悲願である。キリストの本願悲願です。

●コイノニア

「せいざん聖餐」のせいざんことを

「ホーリー コムユニオン」

という。「コン」は「共に」、「ユニオン」は「一つになる」こと。

「共在して一つになる」

ことを「コムユニオン」という。ドイツ語でいうと、「ハイリゲ ゲマインシャフト」という言葉です。クリスチャンが、

「コイノニア」「交わり」

と言いますが、この「コイノニア」の根源はこの最後の晩餐にあるんです。私は今日、そのことを本当に言いたかった。

「交わりを持たなくてはいいかん。無教会は個人主義でいいかん。もつと交わりがなく

てはいかん。教会の方がそれはもう少し行っている」

とか何とか、いろいろ言いますね。けれども、本当の交わりとは、キリストを食べなければ、交わりは出てこない。

私はドイツで、聖餐式とはどんなものかと思って、聖餐式に連なつてみた。集会が終わると、皆の中から幾人かが前にやってきて跪いている。そうすると、牧師さんがお煎餅みたいな薄いパンを一人びとりの口にくわえさせる。手で取つてはいけない。口でくわえる。そして、それをモグモグ食べさせる。それから、葡萄酒の入った杯をもつてきて、それを順繰りに一つの杯からずつと飲ませる。その時にキリストのこの言葉を牧師さんが言う。

「これはわが体である。これは契約の罪の赦しの血である」

というようなことを。私も畏まって連なつた。それは形式であつてはしようがないんですが。しかし、本当に一つの杯から順繰りにみんなが口をつけて飲む。また、同じパンを食べるといふその具体性においてキリストの生命に与かるという——象徴が象徴でなくて——現実となるならば、その意味において、聖餐ということは大事なことです。いわゆる儀式ではダメですけども。

「信仰だけでよろしい。聖餐とか、洗礼は要らん」

と、無教会は言うわけです。それはそれでいいんですけども、しかし、本当の聖餐、本当



の洗礼は、「信仰だけ」ということの中に入らなければダメです。本当の信仰が信仰ならば、本当の聖餐を具体的に靈的に受けて、また本当の聖靈のバプテスマを、十字架を通しての聖靈のバプテスマを本当に受ける。それならば、いわゆる儀式としての洗礼も聖餐も要らぬ。問題は、そこが本ものかどうかということだけ。これが私たちが一步も譲ることができないところの事態なんです。

そういうように、キリストの無限の生命に、キリストの生命に一人びとりが与^{あず}かる。これはみんな、その血その肉に与かるときに、これがもとは一つなんだ。これは共通なものがこの中に流れているから。これは「コムユニオン」（共在して一つになること）に、「コイノニア」（交わり）にならざるを得ない。この「ユニオン」（一つになること）を本当に受けてなかったならば、コイノニアということは生じないわけです。本当の聖餐を受けてなかったならば、その肉を食らいその血を飲んでいなかったならば、私たちがいくらクリスチャンなんて言っただって、

「お互いに愛しましょう。一生懸命にやりましょう」

なんて言っただって、それは外側だけは或るところまで行っても、魂の環流にはならない。環流し、貫流するわけにはいかない。環^わと流れ、貫き流れる。だから、コイノニアというようなことは、その源泉は、この最後の晩餐においてキリストが、

「ここにコイノニアの源泉があるぞ」

と示されたわけです。

● 相対的絶対性

それを私の幕屋的表現では——外側は今度は「幕屋」と言うのはやめたけれども——神(G)を頂点とし、各人ABCを底面とする三角垂体です。皆さんもよく知っているとおりで。けれども、本当に知っているかね。その底面に垂線GX(神・キリスト)という大黒柱が立っている。A、B、Cの「コイノニア」、即ち「交わり」というものは、いくらこれがお互いに手を握ったってダメですよ、そんなものは人間的で。先ず、Aという人物は先ずGXという垂直線と、「神・キリスト・我」というこの交わりを先ずしなければダメです。この縦の三角形(GXA)が成立しなかったらダメです。「神・キリスト・我」という直角三角形がここに成立して、この「神・キリスト・我」という縦の交わりができる、今度は、AXBという——これは人と人の交わり——この横の交わりができる。この横の交わりもAB直接ではダメなんだ。AXBという、こういう角度をもった底面の三角形が、こういう横の交わりの線ができています。これがみんなそうです。BXC、CXAという三角形がそれぞれちゃんとできる。そのときに、みなそれぞれキリストにおいて絶対関係であるから、お互いに、AはBとCとをいきなり比較するようバカげたことはしない。人格関係は、比較したらでてこない。人格関係というのはみなそれぞれ絶対性をもっている。それはX(キ



リスト)を通るから。相対的絶対性という。そういうようなわけですよ。いいですか。これが本当の健全なコインノニアになってくる。先ず、縦である。それから横が自由にでてくる。そして今度は、このABCが自由に環流する。それでこれ(GXA)が同時にL形をしている。これはLという字だ。リヒツ、レーベン、リーベ。光であり、生命であり、愛である。この姿が、幕屋の構造というものは素晴らしい真理を隠しています。この幕屋の空間は聖霊で充滿しているわけだ。それが本当のコインノニアです。

そういう意味において、このキリストを食らうということ。そして、このキリストの血で贖罪された私たちは、はばかりなくキリストの懐の中に飛び込む。キリストの懐の中に飛び込めば、その肉もその血も、食らいまた飲めるといふ。こういう表現ですよ、仕方がないから。

私は、この図の分析は今朝方やったんだ。今朝方3時頃、この真理に到達した。今日はろくすつぼ寝てない。私たちはこの聖書を生命賭けで読んでいるんだから。

かくして、この杯を飲み、この肉を食らうということが何とうれしいことか。キリストのこの本願悲願を身に受けとっていく。私の中にはもう死んでも死なない生命が、何かしらんけれども、流れている。あなた方一人びとりに流れている。もう説明できないです。キリストと神とのこの縦の交わりが生じたところに、今度は自由に横の交わりが展開していく。

「ああ、あなたの中にもキリストの生命が動いているね。その愛が動いているね」

と。これは交流する。開けっ放しです。この胸は開けっ放しである。扉を閉じたような、そんな魂だったら、展開しない。どうか皆さん、今は、生易しい信仰というようなことはダメですよ。祈るといふならば、本当に叫ぶがごとくにたまには祈つてごらん。理屈はいらんから。

●いかに人間がダメかということ

キリストを食らい飲むとは、最後にイエスが十字架にかかる前にこのように晩餐で言われて、しかも、「この私を裏切るやつが中にいる」と言う。何という深刻な劇的な場面であるかと思う。

けれども、キリストは当時の学者、パリサイ人、祭司たちまた官憲にみんなに爪弾きつまはじにされ迫害され、ついには弟子すらも——いや実にペテロは第一弟子といいながら、ユダのごとく裏切ることはしなかったけれども、しかし、本質においては変わりない——キリストを否んでしまった。キリストはそのあとでどう言われたですか。

³¹ここにイエス弟子たちに言い給う『今宵なんじら皆われに就きて躓かん』

「われ牧羊者を打たん、さらば群の羊散るべし」と録しるされたるなり。

この言葉は旧約聖書のザカリヤ書かどこかにある。



32 されど我よみがえりて後、なんじに先立ちてガリラヤに往かん』 33 ペテロ答えて言う『**仮令みな汝に就きて躓くとも我はいつまでも躓かじ**』

ペテロは

「たとえみんなが躓いても決して私は躓きません」

なんて、また力んで言った。いくら人間的に決意したって、決断したって、覚悟したってダメですよ。いかに人間がダメかということは、このペテロが示してくれている。

34 イエス言い給う『まことに汝に告ぐ、**今宵、鶏鳴く前に、なんじ三たび我を否むべし**』 35 ペテロ言う『我なんじと共に死ぬべき事ありとも汝を否まず』
弟子たち皆かく言えり。

「私はあの人を知らない」

とか、

「私はあの人の子でではない」

とか言つて否むという。その通りになった。ペテロはキリストの言葉を思い出して泣いたけれども、はじまらない。結局、ペテロも否み裏切ったわけです。質においては同じこと。何もユダに限らんよ、どの弟子もみんな逃げてしまった。むしろ、女の方が本当に付き従ったということがあるくらいなもので、男はどうも天国には入りにくいです、しつかりしない。

● 洗礼と聖餐は一つ

そういうわけで、キリストはこの最後の晩餐において、いかに霊的なコイノニアの源泉がここにあるかということ深く暗示されたわけでありませう。

コリント前書10章のところを見てください。14節から、

「14 さらば**我が愛する者よ、偶像を拜することを避けよ。** 15 われ**慧き者に言う**ごとく言わん、**我が言うところを判断せよ。** 16 我らが祝うところの**祝いの酒杯**は、これキリストの血に与かるにあらずや、

この

「キリストの血に与かるにあらずや」

というのはギリシア語の原文では、

「キリストの血のコイノニアにあらずや」

という言い方なんです。キリストの血のコイノニアに与かる、血の交わりです。

我らが擘く所のパンは、これキリストの体に与かるにあらずや。

これも

「キリストの体のコイノニアにあらずや」

ということ。「キリストの体」に与かる。キリストの体の交わり。だから、**聖餐を**ここでや



ったわけですよ。主の晩餐を繰り返していた。それで、そのようにして、私たちは本当に具体的に、キリストの生命がお互いに通っている。私たち自身が、今度はキリストの体なんだから、そこに本当に「体」という意味が出てくるわけだ。キリストの血と肉に与かって、そのコイノニアにあるんですから、血のコイノニア、肉のコイノニアですから、そこに各員が、A、B、C、Dというのがみな体の一つの四肢手足なんです。これはパウロがコリント前書12章や、ロマ書6章で言っているところの「体」の事態です。

我々は即ち、キリストを首とし、我々が体であるということの、なぜ体であるかということの霊的な現実はみんな聖餐からきている。キリストを食べること。ヨハネ伝6章とこの最後の晩餐のところから来ている。

だから、御霊の生命ですよ。その血も肉も、これは具体的には御霊です。今度は、御霊のバプテスマということと聖餐ということが一つになってしまふ。洗礼と聖餐は一つになってしまふ。洗礼と聖餐は、切っても切ることのできない関係にある。十字架の上において、

「我もはや生くるにあらず」

と言って、我がキリストと共に十字架されたところに臨んでくるところの——我というものは、自我というものはぶつ飛ばされて、碎けてしまっているんだから——新しき創造が生じてくる。死を通して今度は生が、キリストの復活の生命が臨んでくる。その聖霊を受けることは、聖晩餐でいうならば、「飲め、食らえ」ということなんです。

そして、皆さんに聖霊が臨んできたなら——

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

というが——御霊を宿していればもう、

「コイノニアならざらんと欲するとも能わず」

と言って、お互いに反発するのではなくて、吸引していくわけです。愛は引きつける。愛は相手の中に自分を与えると同時にまた引きつけるという、両方の作用をもっている。これはおもしろいね。

●わが血の血、わが肉の肉

私はこの最後の晩餐をこのように読んだのは初めてだ。それで本当にうれしくなりました。だから、キリストの血のコイノニア、キリストの体のコイノニアでありまして、お互いに今度は本当に——「コイネオー」とは「与かる」という字です——生命にコイネオーするわけです。その与かることは、このキリストの苦難に与かれば、今度は同時にいよいよキリストの栄光に与かるということ。みんなさうです。キリストと「ミットライデン」苦しみを共にし、「ミットフロイデン」喜びを共にする。みなこれは共にするところの、共在的な世界、偕在的な世界です。

だから、新宿へ行って公開の集会をいたしましても、その私たちの集会に聖霊の生命が



溢れるならば、コイノニアを心配する必要はない。ちゃんと、コイノニアは展開して参ります。そして、時に応じて、本当に懇親会でも、また読書会でも祈祷会でも、自由自在に展開して参ります。聞きにくる人たちが、いわゆる傍聴的な態度だったらダメです。私は、いわゆる傍聴的な態度ではダメですよという事はハッキリ言うつもりです。福音の世界は、生きるか死ぬかであって、傍聴して

「福音というものはそんなものか」

と分かるうとしたって、そんな分かるはずのものではない。福音は、分かってつかめるようなものではない。

「福音というものはこういうものだ」

と分かった人は実は分かっていない。福音は、生きて証するほかに、福音を言う仕方がない。証人となることです。

キリストの生命を生命し、血を血とすること。イブがアダムあばらほねの肋骨からできたときに、アダムは何と言ったか。

「これはわが肉の肉、わが骨の骨」

と言った。イエス・キリストこそはわが肉の肉、わが骨の骨、わが血の血であります。これは凄いな、本当にそうだ。わが血の血、わが肉の肉、わが骨の骨はこのキリストである。このキリストとのコイノニア、生命を共にしている。この生命を何ものが、原子爆弾といえども何といえども、奪うことができるかという、凄いな現実であります。現うつであります。それをかく告白することが即ち、福音を本当に分かっているということですよ。証言告白できない者は、福音は分かっているとは言えない。そうでないものは、さっさと来なくてよろしい。新宿へ来なくていい。

私は常に極限を考えて進みますよ。私はたった一人になったっていいんだから。それだけの腹をすえて行かなければ、神さまに本当に喜ばれる福音は伝えられない。

